

近代イギリスのジェントルマン教育 ——家族・学校・社会の連関変化を中心として——

安 川 哲 夫

**The Education of Gentlemen in England 1500-1800 :
The changing relationship between family, school, and the society**

Tetsuo YASUKAWA

は じ め に

本稿は、およそ1500年から1800年に至る時代のイギリスを対象に、中世以来の伝統的な教育様式であった徒弟制が家庭教育へ、そして更に学校教育へと取って替わられていく一連のプロセスを検証しようとするものである。

周知のように、このプロセスに最初に注目したのは、P.アリエスの『アンシャン・レジューム期における子どもと家族生活』(1960年初出)であった。彼は、16世紀における「教育」の觀念の成立から近代学校の誕生、そしてそれが次第に規律化されていく過程に、近代家族意識の発達を捉え、そこに中世から近代への重要なメルクマールを求めていった¹⁾。家庭—学校の連関変化に注目する本研究もアリエスから多くの刺激を受けている。しかしながら筆者は、教育の学校化を親子関係やマンタリテの変化によって説明する方法にはかなり懐疑的である。むしろこの文脈においては、教育を「文化資本」として把握するピエール・ブルデューの立場に有益な可能性を認める。

ブルデューによれば、教育は人々の文化的欲求の現れであり、一種の文化消費活動として捉えられる。そして教育・文化のヒエラルヒーが消費者の社会的なヒエラルヒーに対応している

がゆえに、その獲得と消費の様式は一定の地位を示す指標とみなされ、各階層集団が社会におけるその位置を保持しようとしたり、あるいは階級間の客観的な権力構造を変化させたりするための重要な戦略の道具となる²⁾。彼の関心は主に現代の支配的社会集団の再生産戦略に関する変化に限られ、時間的な系列を欠いているけれども、その理論モデルは歴史的な連関の中においても十分に翻案可能である、と筆者は考えている。N.エリアスの二重の「文明化の過程」(心理的であると同時に社会的)に筆者がこれまで心を強く引かれてきたのも、そこでは権力の関係構造が生活様式と社会的名誉との関係から歴史的に分析されていたからに他ならない³⁾。

本研究は、こうした観点から、家庭から学校への教育の軸の移動が社会の支配構造と権力関係の変化と密接に結びついてもたらされたものであったこと、またこの変化をリードしていったのが、既存の階層特権を保守するために学校に制度的な変革を要求していった社会的支配階層であったこと、そして最後に、この時代を通して学校がその機能を変容させ、社会的区分立ての基準のひとつになっていったことを明らかに

にしようとするものである。因に、16世紀末から18世紀前半の教育思想の展開を扱った本誌掲載の論文「ピーチャムからロックへ」はこの姉妹編である。

I. 絶対主義国家下のジェントルマン教育

1. 騎士から「教養ある為政者」へ

さて、近代以降の変化を叙述するにあたって、中世をそのスタート点として画することには誰しも異論はないであろう。だがこれに関して現在利用できる資料は限られており、目下のところ、理念型で記す以外に手はない。

一般に中世社会においては、真の貴族は、生まれ、勇気、名誉、女性への敬意、誠実さ、謙遜、敬神によって識別され、従ってそこでは、男らしさ、鍛練の知識、礼節あるマナー、音楽や詩歌、階層序列への習熟、彫刻をする能力などが重視された。ペンを用いて書くことができないことは名誉を傷つけるものだと決して考えられなかった。実際、貴族の多くは読むことも書くこともできなかった。このため、その能力を持つことで社会的な地位の上昇を図ることなど減多になかった。中世の階層区分は強く、かつ確固と維持されていた。平民と貴族との間には越え難い断絶があった。貴族として生まれてこなかった者は誰一人として、自分は貴族であるなどと主張しなかったし、またそう呼ばれもしなかった。貴族は戦場や宮廷に広大な職業を見出していた。身分の低い階層と遭遇するような知的職業も持つてはいなかった。双方の階層から構成される教会職においてさえも、高い身分の者と低い身分の者は分離されていた。

このように身分制に固定された中世の時代においては、各階層はそれぞれの身分に応じて、また集団の必要性に合わせて独自の伝統を有していた。人々は、家庭や社会に張り巡らされたそれとの交渉を通して文化様式を体得し、社会的再生産を行っていた。学校が存在していなかったわけではないが、それはもっぱら将来牧

師や書記になろうとする少数の、それも比較的貧しい階層の子弟に限られていた。上流階層の子弟はというと、他の大多数の人々がそうであったように、彼らもまた一般に通常7～9歳から始まり7～9年間に及ぶ徒弟制の形態をとり、奉公人あるいは修業見習いとして上位の階層の家に預けられた。王室や大修道院長の家が貴族生まれの若者を訓練する場であった。貴族の家もまた、彼に忠誠を誓うナイト以下の子どもたちに統治や行政の手ほどきをし、大人世界の経験を与える公的な教育機関として機能していた。王室や貴族の館で若者たちが学んだものは、乗馬、馬上試合、狩猟、ダンス、音楽、それにマナーや礼節などであった。こうした中世の伝統的な教育慣習は16世紀に入っても続けられていたようで、1500年頃この国を訪れたイタリア人は、これが特にイギリス的であるとして次のように記している。

「イギリス人の子どもに対する感情の欠如は特に明らかである。というのは、彼らはせいぜい8～9歳まで子どもたちを自宅においた後、男女を問わず、彼らを他人の家の厳しい奉仕に出し、一般にそこで7年かあるいはそれ以上拘束するからである。徒弟と呼ばれているのがこれで、その期間、彼らは召し使いとしての職務を遂行する。この運命から逃れて生まれている者はほとんどいない。いかに豊かであろうとも、全ての人々は他人の家に息子を送り、逆に見知らぬ他人の子どもを自分の家に引き受けている。」⁴⁾

総じて言えば、近代以前においては、人々は学校とは何のかかわりを持たずに教育された。そして教育のどれもが恭順と服従を助長し、現存の区分を強化する目的に役立っていた。

ところで、アリエスは同じく上記の一文を引用し、そこから家族意識と教育の学校化との相関性を引き出したが、ここでのさしあたっての問題は、外国人を驚かせたこの様式が16世紀を通して次第に廃れ、17世紀には完全になくなっていったという事実であろう。依然として館か

ら離れずに、お雇いの司祭から学問を、獵番から屋外のスポーツを、騎士から武術を教わる者もいたが、貴族の親たちは徐々に息子を学校や大学に送り始めていた。この動きが、封建的で分散的な権力が国家に集中し始める頃から開始されたことに筆者は注目したい。アリエスも、わずかに数行だが、これが絶対主義国家の成立と対応していたことを示唆している⁵⁾。

一般に政治史上においては、ヘンリー七世(在位1485-1508年)の即位をもってテューダー絶対王政の開始と画している。これによって中世から近代へと時代が一気に移ったと言うのではないが、この時代はドラスティックに支配階層が大きな変更を被った時期にあたっていた。かつての有力貴族はバラ戦争の過程で消滅し、86家族あった貴族はその三分の一の29家族に減少した。そして次のヘンリー八世(在位1509-47年)の時代には、二度にわたる大小修道院の解散(1536年と1539年)と強大な貴族の私権剝奪、所領没収、処刑等の一連の王権強化政策の断行によって、自立的な軍事的政治的権力をふるってきた地方の封建貴族は国王の権力下に吸収され、次第に「領主」から「地主」へとその性格を変えていく。

長年続いた中世のマナ領主支配体制はこうして徐々に解体されていくことになるが、かかる共同体秩序の崩壊は、恭順の原理に支えられていた騎士道倫理(chivalry)の衰退をもたらし、彼らの文化理想に大きな変化を加えていく。変化の予兆はすでに15世紀後半の生活習慣や行動様式に現れていた。印刷術をイギリスに最初に導入した人物として有名なウィリアム・カクストン(William Caxton, 1422?-91)は、伝統的な習慣や振る舞い方の規則が支配階層内部において変化し始めた様子を、『礼儀作法書』(1477/78)の中で次のように語っていた。

「かつて習わしとなっていたものが今は顧みられない。日々に新しい振る舞い方が考え出され、その多くは定着することがなく、定まりなくて変わりやすい。以前は許されたこと

が今は非難される。」⁷⁾

カクストン自身は、マロリー(T. Malory)の『アーサー王の死』(1485)、『騎士道の書』(1484)、『武技のいさおし』(1489)などの騎士道ロマンの翻訳出版によって、貴族やナイトがかつて有していた古き慣習と偉大な栄誉とに立ち返ることを訴えていたが、国王を中心とした宮廷社交界の出現は、旧来の支配階層に騎士道倫理とは異なる新しい行為規範の形成を求めている。宮廷では誰もが他者に依存し、かつ国王に依拠していた。このため宮廷に出入りする者は、社会の位階的構造によって段階づけられた威信表示の機会をめぐって絶えず他者と競争し、また他の全ての人たちに対する行動様式において、自分の身分や宮廷での序列に応じて、距離とか接近をこのうえなく調整しなければならなかった。この礼儀作法(civility)に加えて、新たな国家外交政策を担うことが予定されていた廷臣には、更に次のような能力が求められた。すなわち、外国語を操り、古典や近代の歴史に精通し、他のヨーロッパ諸国の制度や経済に明るく、日々起こってくる外交上の諸問題に明確な見通しを与えることができる能力である。

16世紀前半、こうした要求に応じて新しいモデルを提供していったのは、イタリアの貴族や人文主義者たちの著した「礼儀作法書」(courtesy books)と呼ばれる一群の作品であった。エラスムス(Desiderius Erasmus, 1466?-1536)の『キリスト教君主教育論』(1516)、『青少年の言語教育のみならず、人間教育のための家庭での対話集』(1522)、『少年礼儀作法論』(1530)、それにカスティリオーネ(Le comte Baldassare Castiglione, 1478-1529)の『宮廷人』(1528)などの書が、こうして権力の中核にいて政治を司る貴族の礼法指南書として読まれ、テューダー・エリザベス朝期の教育改革者たちにも強い影響を与えていく。

支配構造の変化は、上流階層間の社会的な結びつきや行為規範を変更しただけではなかった。絶対君主制の勝利した国家——トレヴァーニ

ローパーに従って、ここでは「ルネサンス国家」と規定しておく⁸⁾——は、新しい領地を統治したり、古い領地の統治を中央集権化するために、多くの司法・行財政の機関を設け、その業務執行のために数多くの官吏を必要とした。中央や地方においてこの新しい支配者を形成したのは、むしろ旧来の封建領主たちなどではなかった。彼らの中には自分の名前すら書くことができない者がいた。例えばノーサンバランドにおいては、1560年代においても指導的なジェントリ146人の内92人はそうであった⁹⁾。それゆえ、宮内卿、宮内府長官、外交特使、および中央・地方の長官職は少数の有能な（聖職）貴族たちによって占められていたけれども、これら長官のすぐ下において長官を補佐する実務職や政府駐在大使、地方治安判事、陸海軍の司令官や副司令官などの役職には、身分の低いジェントリやそれ以下の才能ある俗人が官吏として次第に取り立てられていった。彼らの多くは大学教育を受けた後、法学院に進んだ人々で、明晰な考えで状況を分析し、文書を起草し、法的な手続きに従って件案を処理していく行政能力に秀でた新しい型の官僚であった。

「ルネサンス国家」の確立と整備は、ジェントルマンが果たすべき公共の奉仕 (public service) の内容を一変させていた。中世騎士道時代においては、ジェントルマンの職分は実践的な領域、とりわけ学者の瞑想的な生活とは正反対の軍人としての生活であると考えられていた。ところが今や軍事的な専門技術に対する要求は弱められ、知的で組織的な才能の要求が増大した。しかしながら、既存の教育機関は依然として聖職者たちの管理下において、スコラ的な学問が主流であった。このため国王は、新しい国家官僚制に配置する官吏を育成する必要から、聖職者養成機関としての性格を色濃く持っていたカンタベリー大聖堂の再編に着手し、そのグラマー・スクールを「大司教の学校」から「国王の学校」へと変更した (1541年)。そして王権の強化のため、大学での教会法の授業を禁止し

てオックスフォードに古典研究のための欽定講座を設置し (1540年)、オックスフォードにクライスト・チャーチ・カレッジを、またケンブリッジに「文学、科学、哲学、技芸、神学」を究めるためのトリニティ・カレッジをそれぞれ創設した (1546年)。

こうした国家の需要に支えられて、初期の人文主義者たちの「新学問」 (new learning) は浸透した。「ジェントルマン＝為政者」たるためには教育を受け、それにふさわしい教養と徳性を身に付けておかなければならないと主張したエリオットの『為政者論』 (Sir Thomas Elyot, The Boke named the Governour, 1531) が、やがて50年間に八版を数えるほどの爆発的な人気を博することになる。人気の秘密は、それが母国語で書かれた最初のジェントルマン教育書であったということにとどまらない。16世紀半ば以降も1553年、57年、65年、80年と着実に版を重ねていった背後には、新たに設けられた治安判事の職に就くべく予定されていた在地のジェントルマン (country gentleman) を対象に、自らの学問的才によって栄達を遂げていった当代ジェントリの典型的な人物によって書かれていたという事実があった¹⁰⁾。地方のジェントリは自立的で直接的な警察力を持っていなかった。そのため暴動が起きた時には中央から軍隊を派遣してもらう以外に方法はなかった。が、軍隊を呼ぶにはかなりの日数を要するため、日常発生する訴訟を手際よく解決し、地域一円の住民を威厳をもって支配していくことが、円滑な行政上どうしても必要とされた。ところが新たな支配者として登場してきた彼らには、それを可能とするような教養も風格もなかった。エリオットは、そんな彼らに対し、ギリシアおよびラテン文学、論理学、修辞学、宇宙形態誌、歴史学、レスリング、競走、水泳、乗馬、舞踏、弓射などのスポーツ、アリストテレス、キケロ、プラトンの諸著作を教育内容として掲げながら、その書の最後でこう訴えたのであった。

「子弟を将来為政者に仕立てたい、あるいは

公共の福祉を司るなんらかの要職に就かせたいと願う読者諸兄は、この書に明記されているような方式で子弟を養育し教育しさえすれば、その時、その子弟は権威、名誉、高貴の地位にふさわしい人物として万人に認められるであろうし、またその為政下におかれる人々はすべて繁栄を遂げ、完成の域に達するであろう」と¹¹⁾。

人文主義者たちによって宣布された、学問や徳が為政者の本質的な要素であるという考えは、かくして、官僚制機構の整備と相俟って次第にジェントルマンの理想を騎士道の軍人から「教養ある為政者」へと変えていく。

2. 徒弟制から家庭教育、学校教育へ

支配階層に求められた学問や文芸の教養は、その効果的な修得のために自ずと体系だった専門的な教育を必要とした。日常的な交渉の中で子どもを教育するという伝統的な教育形式は、この時、その有効性を疑われ、意味なきものとなっていく。最初これに取って替わって出てきたのは、少なくとも子ども時代は、教師を雇って家庭でプライベートに教育する方法であったろう。一般に人文主義の教育家たちは、学校よりも家庭で行う人間形成の方が子どもの個性や能力によく応じうるとして、私的な教育方式を優先させる傾向にあった。エリオット自身、子どもが7歳に達すると「老練な尊敬に値する」家庭教師を付け、大学に進む21歳まで、彼の監督下におくことを勧めていた。家庭教師は、貴族の場合には、館の礼拝堂所属の牧師や昇進を待っている牧師が普通であった。純粹にアカデミックな学問を欲するような場合には、在学の延長を望んでいる大学生が求められた。フランス語や礼儀作法のような特殊な教科に関しては、専門的な家庭教師が雇用された。彼らは貴族の館に住み込み、高額の俸給をもらい、中には影響力を持った貴族の後押しで昇進を遂げていく者もいた。

ところが1560年以降から、学校や大学に通い

始める貴族・ジェントリの数が増大する。彼らは最初は地方の小さな学校へ、それから全国的規模の大きな学校へと出席するようになっていった。この時期は学校拡張の最も活動的な時期にあった。祈唱堂解散令(1547年)によって中世の教会学校が消滅していったのとは対照的に、エリザベス朝期とりわけ1550年代から60年代にかけて、世俗的な文法学校が商人たちの寄付その他の方法で続々と設立されていく。例えば、シュルスベリ校(1551)、トンプリッジ校(1553)、ウェストミンスター校(1560年再建)、マーチャント・テラーズ校(1561)、ラグビー校(1567)、ハロー校(1571)など。19世紀に大パブリック・スクールとして名を轟かせていくこれらの学校は、イートン校(1440)やコレット(John Colet, 1467-1519)によって設立されたセント・ポール校(1512)をモデルにしていた。俗人管理の運営、古典中心の教育、それに寄宿制の採用が、学校の大きな特色であった。

学校の主だった受益者は「貧民」と称されるヨーマン、職人、小商店主たちであったが、ノン・ジェントルマン階層によって独占されていたわけではなかった。イートン校とウェストミンスター校は革命前夜において貴族に特に評判の良い学校であった。なぜなら、これらの学校は、高額の寄宿料、授業料、下宿料をとっていたため、貧しい給費生(scholar)を別にすれば、寄宿生は否応なしに富裕な階層に限られるようになっていたからである。

大学もまた、「第三の大学」と呼ばれる法学院とともに、ジェントルマン層の著しい進出を見た。16世紀初頭にはジェントルマンはほとんど大学には出席していなかったが、入学登録簿はエリザベス朝初期に驚くような割合でジェントルマンが増大していったことを示している。例えばケンブリッジ大学の場合、1550年代の約190人からの1570年代の300人以上へと上昇し、オックスフォード大学でも1570年代の最初の登録から同じカーブを描いた。これをクイーンズ・カレッジの自費性(commoner)を例にとると、そ

の数は1535年の14人から1581年の70人、1612年の194人へと急上昇する¹²⁾。また親が貴族、バロン、ナイトの称号をもつ子弟の入学者も、1570年代および90年代の年7人から1620年代の24人、1630年代の45人に上昇する¹³⁾。貴族・ジェントリの学校進出は、議員に占める大学卒の割合からも裏付けられる。16世紀初頭には皆無であったその数は、1563年には67人、1584年には145人に膨れ上がり¹⁴⁾、下院におけるその割合も、1593年の35%から1640年の57%へと高まる¹⁵⁾。

以上我々は、貴族や上層ジェントリを学校へと向かわせた要因として、支配構造の変化、騎士道の衰退、官僚制機構の整備、人文主義の影響、それに中高等教育機関の拡張を指摘し、その実態を数字で跡付けてきた。しかし、これによって時代の流れがすべて学校へ傾いていたように即断してはならない。1581年の『提言』第39章でマルカスター (Richard Mulcaster, 1530?-1611) が指摘していたように、この時期、貴族の間に子供を私的に教育する方法が「大流行」し、「位はそれほど高くないが、しかし平民よりも少し上にあるジェントルマン」さえもがそれを好んで求めていく風潮が生まれていた¹⁶⁾。理由は、大学にやってくる身分の低い階層子弟との接触によって、ジェントルマンの息子が思想的に毒されたり、卑しい習慣を身に付けるのではないかと彼らが極度に恐れていたからである。この恐れは息子を学校に送っていた親たちにも少なからず共有されていた。学校は依然として学問で生活していかなければならない「貧民」のものであると考えられていた。そこで我々は、再度、次のように問わなければならない。こうした内的な不安や恐慌にもかかわらず、貴族・ジェントリが息子を学校へ送り続けた、ないしは送らざるを得なかったのは何故なのか。また、そうすることができたのは一体いかなる要因によってか、と。

II. 学校化の内的要因

1) 第一に注目すべきは、ジェントルマンとそうでない階層との区分が、生まれ、血統、家柄といった伝統的な単一の価値基準ではもはや通用しなくなってきていたという点であろう。「ジェントリの勃興」と画されるこの時期、経済的な富を背景に台頭してきた商人やヨーマン、それに成功した法律家や官僚の中には、ジェントルマンの必要条件のひとつである土地を購入してその仲間に加わっていく者、ジェントルマン的な生活様式やマナーを模倣することで自らをジェントルマンと称する者、更には貴族のやり方に倣って子弟を教育したり、働かなくても十分に生活できる財産を残してやることでジェントルマン化への道を求める者などが多数現れていた。このため、身分の低い者が称号を得たり、土地所有者になることでジェントルマンになれるかどうか、あるいは逆にジェントルマンの息子が商人の徒弟となった場合、その身分は失われるかどうかに関して活発な議論がなされていく。そしてこれらの議論と並行して、ジェントルマンを新たな角度から見直そうとする動きも生じてくる。1555年に発刊され、1568年と1579年に再版された匿名の書『ジェントルマン綱要』(The Institution of a Gentleman)はこれを最も特徴的に示しているもののひとつである。ジェントルマンは、そこでは以下のような三つに区分される。

- (1) “Gentil gentil”—「ジェントルマンの血を引いている貴族生まれの人間で、息子が公爵、伯爵、男爵、貴族になり、身分の低いところでは、ジェントルマンの家、マナー、高貴な生活様式を有しているナイト、エスクワイアになる」人々。いわゆるジェントルマン中のジェントルマン。
- (2) “Gentle ungente”—貴族の血を引いているが、その墮落したマナーや教養のなさからジェントルマンではないと判断される

人々。

- (3) “Ungentle gentle”—「身分の低い生まれで、財力もなく、家柄もよくないが、徳、機知、知謀、勤勉、法律の知識、軍隊での勇敢さなどから人々に愛され、高く評価されている」人々。

『ジェントルマン綱要』の著者は、土地購入などの「不適切な」手段によってジェントルマンの名前、エスクワイアーの位、ナイトの称号を獲得した新しい種類の人々に対しては、彼らを「正真正銘の成り上がり者 (upstartes)」と呼んで激しい憤りを示し、本書の対象から除外する。しかし同じ「成り上がり者」でも、徳、武勇、学問から国家に有為な職業に就いている人々に対しては、彼らこそ「国家社会のひとつの柱、支柱」であり、「通常ジェントルマンと呼ばれている人々の子どもたちである」とその存在を高く評価する¹⁷⁾。

かつては、ジェントルマンの名は由緒ある高貴な生まれの人間以外には拡大されなかった。16世紀においても依然強固な身分階層制度が存在し、ジェントルマン化への道を歩むことができる人間は非常に限られていた。にもかかわらず、上で見てきたようなジェントルマン概念の質の変容と量的な膨らみは、ノン・ジェントルマン階層の人々が徳や学問といった個人的な資質によってジェントルマンへと上昇していく可能性を拡大し、ジェントルマンとそうでない階層との間に横たわる障壁を論理的に打ち崩していく。これに重要な役割を演じたのは、社会的地位が上の人々とも下の人々とも結びついていた「半独立の」中間的職業階層であった。サー・トマス・スミスの『イングランド国家論』(Sir Thomas Smith, *De republica Anglorum*, 1565) や、教区牧師ハリソンの『ブリテン島の歴史』(William Harrison, *An Historical Description of the Island of Britayne*, 1577) は、ジェントルマンの名を与える職業について注意を向けた初期の作品だが、後者のそれには次のように書かれていた。

「王国の法を研究する者、(おのが心を書物に

捧げて) 大学に留まる者、あるいは自然科学ならびに人文諸科学を教える者、また戦時において指揮者として軍務に服する者、および国内にあって国家を益する助言を与うべき職にある者、額に汗して働くことなく生計を立て、しかもジェントルマンにふさわしいポスト、責任を担い、かつ落ち着きをもって人と接する者は、すべて、お金の代わりに、公認の紋章を賦与され、エスクワイアおよびジェントルマンに与えられる敬称である『マスター』をもって呼ばれ、以後、常にジェントルマンとして通るであろう。」¹⁸⁾

我々はここに、ジェントルマンの教育の歴史において一大画期をなす「ジェントルマン的職業」(Gentleman's Calling)の成立を見ることができ。長子相続の恩恵にあずかれない中小ジェントリの次三男や上層市民階層は、これ以後、上述の職業を通してジェントルマンになる新しいバイパスを手に入れることになる。がしかし、何が「ジェントルマン的職業」であるのかについてはこの時代しばしば議論があった。

『ジェントルマン綱要』の著者は、ジェントルマンにふさわしい職業として、(1)法律家、(2)軍の将校、(3)大使、(4)州の治安判事の四つを挙げ、ジェントルマン以外のいかなる者もこの役職に就くべきではないと主張した。だが四半世紀後、マルカスターは、(1)参事官、(2)牧師、(3)弁護士、(4)医者とランク付けを行って、ジェントルマンが占めるべき職業とした。「ジェントルマン的職業」の領域は徐々にではあるが確実に拡大され、平民にも次第に手の届くところに近づいてくる。学校教育はこの「ジェントルマン的職業」への準備教育として不可欠な地位を占め、以後ますますその価値を高めていくことになる。

ところで、ジェントルマン概念の拡大と「ジェントルマン的職業」の成立は、しかし一方で、ジェントルマンとそうでない階層との、またジェントルマン階層内部での区分を曖昧にし、既存の支配階層に社会的地位に対する不安や不満——例えば、本来自分たちが就くべき政治上

行政上の高級役職もが、このままでは身分の低いジェントリ以下の階層に食われてしまうのではないかという不安——を形作っていく。ここで重要なのは、こうした不安がジェントルマンたるべき条件の実質的な変更を迫り、教育に対する圧力を形成していったという点である。

その前兆はすでに1540年代から50年代に現れていた。彼らは、1541年のカンタベリー大聖堂の再編に際しては、グラマー・スクールにジェントルマンの子弟以外の入学を認めないように働きかけ、また1559年には、貴族の無知を戒め、ジェントルマン以外の階層の就学機会を制限する以下のような覚え書き——バーリー男爵ウィリアム・セシル (Baron Burghley; William Cecil, 1520-98) 起草と言われる——を議会に提出した。

「本布告は、貴族をして、その子弟の養育にあたり、少なくとも12歳から18歳までは、本国あるいは海外の大学で、学芸を修めんがために作成されたもの。(中略)貴族の気紛れな養育と無知は、君主をして、有用な新人を当用せしめるの余儀なきに至らしめている。しかも、新人の多くは、素性賤しきため、真の名誉心なく、(また性急に富と名誉を貪るがために) 国家の繁栄を考えることなく、その義務とかつての身分を忘れ、自らの地位を得んがために、貴族の家系を壊す。(中略)よって、各大学の奨学金の三分の一は、比較的貧しきジェントルマンの子弟に充てられるべきである。」「法は統治と政治の入門なれば、貴族およびジェントルマンの子弟以外は、[法学院での] 法の学習を許さざるべきこと。」¹⁹⁾

これらの提案は結果的には実施に移されなかったけれども、威信の回復と既存の権利の保持のため、ジェントルマンはかつて軽蔑していた学問を自ら求め始めた。彼らが学校や大学、更にはその上の法学院にまで子弟を積極的に送り始めた時期(そのピークは1570年代と80年代)が、貴族に代わってジェントリが長官職をも独占していく時代と完全に合致していた事実は、

このことを端的に物語っている²⁰⁾。

2) 貴族・ジェントリの学校進出を推し進めた第二の要因は、支配階層が既存の階層構造の維持と固定化のためにとり始めたこうした教育態度と密接に結びついている。

16世紀後半、息子を学校に送り始めた貴族や上層ジェントリの親たちは、その生まれながらの特権を教育制度にも要求し、「貧民」子弟の学生とは異なる独自の取り扱いを求めた。そして学校側もこれに応じて様々な改革を試みていった。例えば大学は、子どもたちに高度な学問的教養を与えたいという親の願望に対しては、それぞれの教科にカレッジ・レクチャーを指名し、また息子を厳格な監督と道徳的訓練の下に置きたいという要求には、若いフェローを彼らの教師および保護者として使った。こうして全ての通学生に一人のチューターを割り当てるという有名なチュートリアル・システムが確立されてくる——オックスフォード大学の場合、1564年にエクセター、1572年にベイリオール、1572年にブレイズノウズ、1583年にユニヴァーシティ・カレッジにそれぞれこの規則が正式に制定される。これらに加えて更に大学は、別途に規則を設けてトランプ遊び、さいころ遊び、決闘などを禁じ、また外界の誘惑から学生を保護するため、学校の回りに高い壁を築いたり、校門をロックするなどした。

カレッジ・レクチャーの指名、チュートリアル・システムの確立、学校生活の規律化、安全体制の確立といったこれら一連の制度的改革によって、ほとんどの学生は自分の所属のカレッジで古典学、哲学、神学、論理学の講義に出席することができ、またポケットマネーを含むすべての支出項目がチューターによって監視・統制されるようになった。大学は、こうした親方一徒弟関係にも似た状況を教師一生徒間に作り出すことで、用心深い親たちに、最も危険な年齢時期に息子が少なくとも安全な場所に置かれるという保証を与え、他家での奉公という制度の代替機関としての社会的承認を取り付けるこ

とができた。

しかし、学校のこうした外的な条件整備や人間形成的機能によっても、ジェントルマンの親たちの学校に対する不信感には払拭されなかった。なぜなら、そこでは依然としてジェントルマン子弟が「貧民」子弟と一緒に教育されていたからである。ジェントルマンは、良きマナーの修得は良き仲間を保持することにかかっていることを自覚していた。このため彼らは、息子を校長の自宅に下宿させたり、カレッジに専用の一室を要求したり、召し使いや専属の家庭教師を同伴させたり、また勉強や遊びの仲間として年下の弟たちを長男と一緒に就学させるなど、一般の学生とは異なる教育行動をとっていた。そうした中でカレッジにはまた独自の制度が編み出された。ケンブリッジで〈fellow-commoner〉、オックスフォードで〈gentleman-commoner〉と呼ばれる「特待自費生」の制度がそれで、ジェントルマン階層の子弟は好んでこの制度を利用した。

これらの学生や制度は、大学入学者登録名簿を基に進められてきた従来の教育史研究においては十分に注目されてこなかったように思われる。というのは、彼ら学生の多くはしばしばその記載から漏れており、半匿名的な学校生活を送っていたからである。従来の教育史研究のこの盲点をつき、その未熟さを皮肉りながら、原資料がいかにか当てにならないかを証明したのは、社会史家L.ストーンであった。彼は、例えばオックスフォードのウォダム・カレッジの場合、特待自費生92人のうち少なくともその三分の一強にあたる33人は入学許可を受けていなかった事実を指摘しながら、大学への貴族・ジェントリの出席の割合は、入学者登録簿がかなり完全になった王政復古以後においてさえも、その数字が示唆するよりも恐らく最低で5%以上、また大学教育を受けた国会議員の正しい数字は、最低で10%以上高かったと主張した²¹⁾。筆者としても、ストーンによって発見されたこの学生の存在に特に注意を喚起したいと思う。という

のも、以下に見るように、彼らの生活様式は象徴的に示されたひとつの特権的な指標であり、学校の公文書では隠蔽されてなかなか見えてこない権力関係を明らかにしてくれるからである。

「特待自費生」は差別と排除の原理が意識的に組織化された制度であった。例えばホールでの夕食の時、彼らはトルコ産の絹織物で作られ、金のレースやビロード、緑色のラシャ、金めっきのボタンで飾られたガウンを着用した。そして大学のフェローと同じ一段高い段上のテーブルで(他の一般学生は床面のテーブル)、銀の燭台の蠟燭の光を受けて、会話を楽しみながら晩餐した。また外出の際には、その目立った服装によって下位の階層の学生から自分たちを区別した。勉強に対する態度においても、彼らは「貧民」出身の給費生や授業料免除学生(sizar)とは本質的に異なっていた。ジェントルマン子弟(特に長男)は、将来学問で身を立てるためではなく、一般教育のために大学に送られてきていた。このため彼らは、いかなる学位も取らず、正規の課程の一部だけを勉強し、時には途中で国内や海外の他の大学、アカデミーに移っていった。学位や聖職禄を取るために日々勉強しなければならなかった「貧民」子弟の学生たちと肩をすり合わせて競争する必要もなかった。そうすることで彼らは下位の学生と距離を保つことができた。

教育的で訓育的な制度として教育史上特筆されるチュートリアル・システムも、実態としては、それ本来の機能を彼らには十分に行使することができなかった。なぜなら、このシステムは親とフェローの個人的な契約に多く依存していたため、チューターは高い謝礼を払う生徒には寛大で、彼らの規則違反にも見て見ぬふりをする態度をとりがちであったからである。従ってジェントルマン子弟は、厳格な規則があるにもかかわらず、ギャンブルや放縦に走り、怠惰な生活を送っていた。教区牧師ハリソンはこうした実態を当時次のように嘆いていた。

「ジェントルマンや富者の子弟は、往々にして大学の名誉をひどく傷つける。それは彼らが、自分たちの名声と特権をかさにきて、華美な服装をし、彼らを書物から脇道に引っ張っていく放埒な仲間に加わって、威張り散らし暴れ回るためである。そして彼らが良俗を破ったと非難された時には、我々はジェントルマンだと言いさえすればそれで申し開きのできたものと考えているが、これは多くの人々にとってはなかなか我慢のならぬことなのである。」²²⁾

学校や大学は、社会の階層の差異をそっくりそのまま導入することによって、ジェントルマンの親たちに安心感を与えることができた。これまで領主館の戸外生活や宮廷の陽気な生活に慣れてきた貴族の若者たちも、学校が取り計らってくれる優遇措置や親・教師の被護関係から、自由に放埒な学生生活を送ることができた。公的な資料には表立って現れてこないかかる実態こそ、上流階層が息子を大学に送ることができた大きな理由のひとつであった。

3) 教育の学校化の要因として最後に考慮されるべきは、教育基盤の消失、つまり、上流階層子弟の教育の場であった領主館や修道院がもはやジェントルマンを教育するのにふさわしい場所ではなくなってきていたという事実であろう。百年戦争、バラ戦争の後にやってきたテューダー・エリザベス朝期は、比較的平和で経済的な繁栄を遂げた時代であった。長年にわたって中世の精神的支柱を体現していたゴシックの教会建築は終わりを告げ、敵の攻撃から守るために作られた城壁や市壁は取り壊され始めていた。家を要塞化しなければならないという気持ちは人々の心から完全に消え去り、ジェントルマンはこぞって富と権力の証として田舎の領主館を新築ないし増築した。修道院の教会堂の屋根ふき鉛板や石材がそのために供され、広々とした応接間、執務室、採光のよい回廊、それに出窓をもった「邸宅」様式がこうして誕生した。邸内にはルネサンス式の装飾が施され、壁には

当時流行した肖像画が掛けられた。また敷地は囲い込まれ、乗馬で鹿狩りや兎狩りをするための広大な庭が作られた。

邸宅様式の家屋建築は家の人的構成や機能の面に大きな影響を及ぼしていた。「家」(household)と「家族」(family)の間には一線が画され、私室は召し使いの宿舎や事務所から切り離された。かつてのように家族と召し使いが食卓で一緒に食事をする習慣は徐々になくなっていった。この分離が、社会的に、機能的に、さらに地理的に広がっていくにつれて、貴族の若者が召し使的な分野で訓練されたり、参考になる実例を学んだりする機会は少なくなり、中世的な教育実践は次第に受け入れられなくなった。

以上見てきたように、ジェントルマン層の著しい進出をみた16世紀後半以降、学校や大学はもはや貧民子弟の独占物とも、また職業のための単なる準備機関ともみなされなくなっていく。学校は今や徒弟制に代わる人間形成的役割について公的な承認を得た。がしかし同時にそれは、多くの貴族・ジェントリからは、社会における自己の位置を維持し、支配を正当化していく手段として把握され、また他方、中流階層からは、新たな利益を勝ち取り、ジェントルマンとなっていくための重要な社会の道具として認識された。テューダー・エリザベス朝に始まった学校化をめぐる一連の出来事は、学校が保守したり変化させようとする各集団の重大な戦略的地点に立ち始めたことを示している。

Ⅲ. 復古以後のジェントルマン教育 ——家庭教育の時代か？——

ところで、16世紀後半から17世紀前半にかけて起こった学校化のうねりは、以後いかなる展開を遂げていくのであろうか。革命以後、「反乱の核は大学である」(ホップス)、「大学は放蕩の場であり、毒薬である酒を飲むことを学ぶ学校である」(クラレンドン)という声が、指導的な

立場にある人々の口から聞こえてくる。かつてオックスフォードのベイリオル・カレッジで学んだA. スミスが、『国富論』（1776年）の中で母校を評して、「大学ではほとんど教授が長年にわたって教える振りさえ止めている」と語ったのはつとに有名である。

こうした同時代人の言説から、後世の研究者たちも一般に、17・8世紀の中高等教育機関は全般的な「低迷」・「沈滞」の状況にあり、ロックによって提唱された家庭教育が再びジェントルマンの教育様式として流行した、と主張してきた。例えば、王政復古から18世紀後半までの礼儀作法書や教育論を分析したG.C.ブラウアーは、貴族たちは「家庭で暮ることが自分たちの好みに合っていることを発見した」と主張し²³⁾、また18世紀の「公私教育論争」を扱ったF. マスグローブも家庭教育論者の説が説得的であったとし²⁴⁾、後の論文では「家庭教育が18世紀の終わりまで質と量の双方において勝利した」と断言した²⁵⁾。

DNBに掲載された18世紀知的エリート3500人の教育経歴を調べたN.ハンスの研究は、こうした見解を実証的に基礎づけていた初期のもので、彼は、実にその4分の1以上が完全に家庭だけで教育され、貴族の4分の1、ジェントリの3分の1がこの方式を採用していたとして、「貴族やジェントリの称号をもつ、より洞察力のある親たちは」家庭教育を選択した、と結論づけた²⁶⁾。ハンスの結論は、その後、W.A.L.ヴィンセント²⁷⁾、D.ウォードル²⁸⁾らによって引き継がれ、オックスフォードの学生について大規模な調査をしたストーンも、「17世紀後半および18世紀を通して、オックスフォードに通った社会的エリートの子弟の割合は少なくなっていた」と述べて²⁹⁾、ハンスの見解を裏付ける格好となった。

しかし、最近の研究は、この時代を学校教育の衰退＝家庭教育の隆盛として捉えるハンスらの図式を必ずしも支持していない。この検討は後に譲るとして、ここでは、入学登録者数や評

判といった表層に現れる変化は、学校の深層において起った変化を必ずしも十分には反映していないこと、教育の場の関係変化は、支配階層が社会的再生産手段としてどれほど学校を利用していたかという、程度の変化に大きく左右されることを理解しておくことが重要である。かかる観点からこの時代の教育の歴史を眺めれば、そこにはおよそ以下のような三つの特徴が指摘されるのではないだろうか。

1. 大学の階層構造化

第一は、大学内に学生の出身階層に応じた構造化が進行し、その制度的編成が社会の階層構造と対応するようになっていったこと。

オックスフォード大学の学生規模とその社会的出自を分析したストーンによれば、同大学の学生数は1600年後急速に増大し続けたにもかかわらず、平民出身の学生の占める割合は、1557—79年の55%から1637—39年の37%、1711年の27%へと次第に減少し、そして1760年の17%、1800年の1%にまで落ち込んでいく³⁰⁾。そして代わりにジェントリやエスクワイアの比率が上昇する。平民出身の学生でこの時代生き残れたのは、専門職それも牧師の息子たちだけであった。平民の入学者の落ち込みは主に経済的な要因からきていたが、内部的には、ジェントリ層が有力なパトロネジの獲得などによって奨学金制度を侵食し始めたことによっていた。イギリスでは所領や財産のすべては長男によって相続されるため、ジェントリの親たちは伝統的に次三男以下の子どもたちを都市の商人や手工業者の徒弟として出したり、また聖職者や法律家などの専門職人として生計を立てさせるため学校に入れる習慣があった。これゆえ、それほど裕福ではないジェントリ層は、より確実な入学方法として、身分を商人と偽ったり、縁故関係を生かして奨学制度を利用していた。また16世紀後半以降の土地入手熱を背景とした「訴訟の時代」の下、エスクワイアの間に相続者に一般教育と並んで法律に関する専門的な知識を身

に付けさせようとする気運が生じ、これが彼らの学校進出を促していた。

このように見てくるならば、大学は、大きく分ければ、学位や聖職禄を求めてやってくる平民と一般教育を求めてくるエスクワイア以上の階層集団とに区分されていく過程がよくわかる。因に、これに伴い11歳から30歳の幅で大学にやってきていた学生の年齢構成にも変化が現れる。1590—92年において2年あまりあった平民とジェントルマン子弟との入学年齢の差（後者の平均的な入学年齢は16歳で、前者に比べて2歳年下であった）は、1637—39年には約1か月に縮小され、同時に、年齢による区分の全面的欠如というテューダー・エリザベス朝期の学校の特徴も17世紀を通して次第に解消されていく。なお、この原因についての説明はここでは割愛する。

ところで、上述の学生組織における大学の階層構造化は、その結果として、内部の制度編成上に重大な影響をもたらしていくことになる。学校や大学が、貴族の子弟の就学にあたって私的な一室を用意したりするなどの優遇措置をとっていたことについてはすでに触れた通りであるが、学校側のこうした配慮は18世紀においても更に続けられていく。例えば、イートン校では貴族の少年を各クラス名簿の最初に置く実践が増大し、1766年以後は彼らの名前は朱色で書かれた。大学での貴族の特権も、カレッジ教育のコスト上昇——16世紀後半から17世紀前半において年30～40ポンドであった自費生の費用は、17世紀後半から18世紀前半にかけて急上昇し、1750年頃には80～100ポンドになった——に伴って一層強化された。

コスト上昇を招いた主な原因は、授業料や入学金の値上げ、校舎基金、図書館、庭などの設備費の新料金体制の確立であった。しかし費用の大部分は、教育とは別の用途、例えば、年長の学生が他の学生の日から逃れて雑談したり、酒を飲んだりすることができる談話室、私的な会食、ワイン、流行の衣服、狩猟のための馬、

学寮長たちが休息を取るプライベートな庭の維持などに充てられていた。一部屋を数人の学生で共有するという実践は時代遅れとなり、学生は今や一人で、時には三部屋ひと続きの贅沢な設備の下で生活した。18世紀始めにオックスフォードを訪れたフランス人はカレッジを「宮殿」と記すほどであった。

特待自費生は相変わらず豪華なガウンを着、フェローたちと一段高いテーブルで食事をしていった。加えて彼らは、校僕(servitor)と呼ばれる身分の低い学生から給仕を受けた。校僕は前者が食べ残したものを食べた。このシステムはあまり良く言われないが、しかしこれによって彼らには多かれ少なかれ無償の教育が確保された。また就職の機会の少なかった給費生や免費生は、それを通して形成されたパトロネジを活用することによって、社会的な上昇移動を可能にしていた。

特待自費生はこれ以外にも様々な特権を享受した。彼らはフェローの庭やカレッジの地下室に自由に出入りすることができた。オックスフォードのリンカーン・カレッジでは、フェローに会釈することは要求されなかった。図書館の鍵も渡されていた。貴族たちは正式の口述試験を受けずとも学位が与えられた。講義に出席しなければならないこともなかったし、制服を着なければならないこともなかった³¹⁾。

学校や大学はこのように当時の社会の組織原理、つまり特権とパトロネジをますます反映していき、高度な消費生活の場と化していった。そしてそれは、ジェントルマン子弟が慰みと気晴らしを満たすための一種の社交サークル、文化サロンとして機能した。かかる学校の変貌は、基本的には、ジェントルマンにふさわしい地位や生活様式を与えたいという親の願望や要求の増大から生じてきていたが、同時にそれは、学校教育を通してジェントルマンへの転身を図る商人層に対抗して、自己の権限と利益を守ろうとする彼らの教育戦略からの当然の帰結でもあった。大学の内部において見られるこの戦略

は、更に二つの教育動向を17・8世紀を通して形成していくことになる。海外旅行の普及と特定の学校やカレッジへの集中化がそれである。

2. 海外旅行の普及

厳密に言えば、学校は貴族にとって唯一の教育制度ではなかった。まずすべての親が息子の将来の生活に役立つ教科を教えてくれるようなチューターを見出したわけではなかった。また子どもたちの多くは学校のペダンティックな勉強に嫌気がさし、放蕩な生活を送っていた。このような状況の中で、親たちは、立派な家庭教師がカレッジのフェローと同じようにアカデミックな教育と訓育を与えることができることに気づき始めた。学校の最大の利点は相互訓練と社会的交渉を与えてくれる点にあったが、これさえも外国の大学やアカデミー、また1530年頃から小数の貴族の間で始まっていた海外旅行で十分に可能であった。

海外旅行は、元来、宮廷で外国の要人を接待したり、大使や外交官として国王に仕える貴族が、語学と礼儀作法の習得、また欧州各国の政情に通じるために始めたものである。イタリアが古典的学問の中心地として、またヨーロッパの偉大な知的強力国として人々を魅了していた。ところが1610年代に高名な貴族たちの間に古代遺物への愛好とルネサンス絵画の収集が芽生えて後は、彼らは異なった動機から旅行を始めた。旅行の重点は知的なものから社会的、美的なものへと移っていった。ギリシア・ローマ時代の古代の遺物を見て回り、芸術に対して理解あることを示すために美術品を蒐集して持ち帰ることが最大の関心事となった。16世紀後半に R. アスカム(『学校教師』1570年)らによって一時批判されたイタリア旅行が、芸術や建築の豊かさから再び評価され始めた。

17世紀のジェントルマンの海外旅行ブームに最も大きな影響を与えていたのは、ピーチャムが『完全なるジェントルマン』(1622年初版)で説いた「ヴァーチュオーソ」の理想であった。

彼は、1634年に加筆された「古代の文物について」と題する章で、こう語っていた。

「高価さゆえに珍品の古代遺物を所有することは、本来、君侯たち、というよりも君侯の精神を持つ人々の趣味である。……そうしたものに通暁している人々はイタリア人たちによって「ヴァーチュオーソ (Virtuosi)」と呼ばれている。」³²⁾

ヴァーチュオーソは、社交家理想と学者理想とが融合してもたらされた階層区分の不明確化という危機を、学問をより高度に趣味化することで打開しようとして作られた17世紀の新しい人間類型・文化理想であった。それゆえ、古代遺物の鑑賞と識別能力をジェントルマンに「愉しみ」であると同時に「有益」と推奨するこの理想は、当初から、学問をその政治的社会的な価値においてよりもむしろ、他からジェントルマンを区分し、ジェントルマンが卓越化するための指標として重視する姿勢で貫かれていた。海外旅行は、ここから、経費の高さゆえに容易に下位の階層に模倣されない利点を兼ね備えた制度として、従ってまた社会的な差異とジェントルマン独自の文化の獲得様式のひとつとしてパターン化された。

因に、貴族たちの間で旅行が特に盛んだったのは16世紀後半から17世紀の初頭で、1570年―1639年に約150人の貴族がオックスブリッジに通い、同時期に約65人が2～3年間の海外旅行をした³³⁾。この貴族の教育慣行がやがてジェントルマン教育の総仕上げとしての地位と役割を獲得し、18世紀には、上の階層の教育や生活様式を模倣することに懸命であった中流階層をも巻き込んで、「グランド・ツアー」として制度化され、大流行していくことになる。

3. 特定の学校・カレッジの貴族独占

海外旅行と並んで、貴族が持ち込んだもうひとつの戦略は、小数の特定の学校やカレッジに結集し、その凝縮性と共通の教育によって社会的な同質性を確保しようとする方式である。

貴族の親たちが息子を送るにあたって最も重視したのは学校の名声であった。その名聲はチューターの性格と才能にも左右されたが、大部分はそこにかかる階層の若者が多く通っているかにかかっていた。従って、貴族の子弟は自ずと比較的上流の階層子弟が集まる学校やカレッジに集中する傾向にあった。中等教育段階で貴族の学校という名聲を獲得していたのはイートン校とウェストミンスター校であった。復古後はこれにウィンチェスター校とハロー校が加わった。大学においても特定のカレッジに同様の傾向が確認される。この社会的排他性ゆえに、親たちは、いくらかなりとも、子どもが悪い友達を作るのではないかと心配せずに済んだ。

ところで先程、この時代を家庭教育の時代とするハンスの見解に疑義を表明したが、これは、近年のJ.サイモン³⁴⁾、M.V.ワルバンク³⁵⁾、J.キャノン³⁶⁾、J.V.ベケット³⁷⁾の研究を下敷きに、上の貴族の教育戦略を考慮した上での異議申し立てであった。例えば、18世紀の貴族子弟の進学状況を詳しく分析したキャノンによれば、貴族階層の間には18世紀を通して学校への奔流現象が起こっていた。彼はこれを、貴族をその生まれに応じて段階区分し、次のように立証した。1680年以前生まれの貴族のうち、イートン、ウェストミンスター、ウィンチェスター、ハローの名門四パブリック・スクールに通ったのはわずか16% (42/259人) に過ぎなかったが、その比率は1681—1710年の35% (82/235)、1711—40年の59% (143/244)、1741年以後の72% (156/216) へと増大した。こうした貴族の特定校への集中化傾向は下院議員の教育歴からも伺えるものであって、上記四校の占める割合は、1715—54年の18% (405/2041) から1754—90年の36% (729/1964) へと上昇する³⁸⁾。なおこれをワルバンクの資料で補足すれば、1775—1800年間に公職を保持した大臣のうち、87パーセントが古典的な寄宿学校に通い、またそのうちの83パーセントが特権的な寄付金立の学校に通っていた

ことになる³⁹⁾。

この傾向は大学にも見い出せる。大学に通った貴族の数は、1680年以前生まれの者の36%から1741年以後生まれの者の57%へと上昇し、全体的な学生数の割合を見れば、その比率は二倍に膨れ上がった。但し、貴族の大学への進学は特定のカレッジに偏っており、最後の20年間をとれば、オックスフォードのクライストチャーチの場合、その比率は80%、ケンブリッジではどのカレッジも相対的な優位を確立するのに成功しなかったが、それでもトリニティとセント・ジョンを合わせれば62%に達する⁴⁰⁾。ハンスの統計も、ケンブリッジの特待自費生が世紀前半の10%から末の18%へと、またオックスフォードの紋章を付ける資格のある卒業生の比率が5%から30%へと高まったことを証拠立てており⁴¹⁾、大学生活における貴族社会の影響はこの世紀が他のどの時代よりも大きかったことになる。

従来の通説に反して、多くの貴族・ジェントリがますます学校に通い始めたこと、しかも特定の学校やカレッジ集中していったことは明らかな事実であるように思われる。では、こうした傾向はいかなる要因によって促されてきたのであろうか。

教育の内容や方法に学校を今までよりも魅力的なものにする改善はなされなかった。経済的な要因は確かに大きな動因には違いないが、家庭教育と学校教育とのバランスに決定的な影響を与えたとは考えられない。学校の授業料その他に支払う以上に、家庭教育に要する費用が大きかったからである。ベケットは、法の実践家もジェントルマンでなければならないというブラックストーンの主張が効力を発揮し、大学へ通うことが将来判事となる者の正規的教育歴の一部となった、と主張する⁴²⁾。1680年から80年間にイングランドの治安判事の数が2196名から7334名へと三倍以上に飛躍的に増大していた事実を重ねれば⁴³⁾、全く根拠がないわけではないが、いまひとつ合点がゆかない。その点、キャ

ノンの説明はかなり説得性をもっているように思われる。

キャノンによれば、当時のイギリス貴族たちは、ロックの反論にもかかわらず、パブリック・スクールの粗野と混乱が公共生活への最良の準備であるという、復古期にオズボーンによって主張された意見に同調していた。そしてこれは、17世紀後半に議会在が権力と影響の中心としてその重要性を増大したことによって確固たるものとなった。今や貴族・ジェントリの間に息子を社会や政治の指導者に適した人間に育てようとする意図が高まり、ここから彼らは、早くから政治家の苗床としての評判を獲得し、この時期際立った議会経歴を持つ卒業生たちによって人気を一層高めていたイートン校やウェストミンスター校に息子を積極的に送った。キャノンはこのように主張して、学校が公共生活へ向けてより良く準備してくれるという認識の増大が、家庭から学校への比重の移動の主たる原因であった、と言う⁴⁴⁾。

彼の主張は、名誉革命後の体制の安定化の中で、土地貴族は金と手間のかかる政治のみが自己の支配を維持する手段であることを発見した、とする水谷三公(『英国貴族と近代』1987年)の説とも符号する。しかし、残念ながら、それはあくまでも結果から推論されてきたものであって、グラマー・スクールや大学が公共の生活の準備に適したものであったという証拠は何ら得られない。もっとも18世紀前半、デフォーやスウィフトのように政治家としてのジェントルマンの意義を強調し、この点からの学校教育の優位を唱えた論者もいたが。

筆者はここではむしろ、キャノンが副次的に用意したもうひとつの説明、つまり、上流階層が分裂したならば何が起こるか分からないという、内乱によって生みだされた恐怖心が、貴族の間に共通の態度と目的を促進したとする解釈に魅力を感じる。

パブリック・スクールや大学の古典教育は、実際、知識以上のものを与えた⁴⁵⁾。18世紀の教育

書を見るならば、そこには学校教育を通して培われる友情やパトロネジに多くの力点が置かれたことが伺われる。更に重要なことには、この時代、貴族の階層的閉鎖性の強化と連動して、主要パブリック・スクールは上流階層の学校、地方のグラマー・スクールは中流階層の学校といった具合に、教育の制度と社会の階層構造との間に密接な対応関係が形成されていく。このことは、学校がある特定の職業に就くための前提としてではなく、社会的地位からくる当然の結果として捉えられていったことを意味している。18世紀の半ば、ウェストミンスター校を「下品なマナーと野蛮な行動様式の巢窟」⁴⁶⁾とこきおろしたチェスターフィールド伯でさえもが、息子をそこへ送らざるを得なかったのも、おそらくこれによるであろう。

このように学校が社会的に区分され段階づけられていくと、そこには自ずと階層や趣味によって結びついた共通の標準的な教育というのが出来上がり、それが学生の間一体感や同族意識といったものを生み出していく。具体的に何を学んだかということではなく、どの学校を卒業したのか、あるいはどのような教育歴を経てきたのかということが意味をもってくるのである。さしずめジェントルマンにあっては、このコースは、名門パブリック・スクールを卒業して、次に大学——オックスフォード大学ではクライストチャーチ・カレッジ、ケンブリッジではトリニティ・カレッジ——に進み、その間あるいは卒業後に2～3年の海外旅行に出るというものではなかったろうか。復古後における学校化の加速化傾向は、貴族・ジェントリ層にこの教育パターンが形成されていったことを示している。

む す び

以上我々は、貴族・ジェントリ層に見られた教育動向の変化を中心に、緩慢ではあるが累積的な学校化のプロセスを検証してきた。パプ

リック・スクールがジェントルマンを作ると言われた19世紀はもうすぐそこに来ているのであるが、ここでは最後に、前工業化の時代を通して進行していった学校化の結果、学校が新たに社会的差異の生産という機能を確固たるものとしていったことを付け加えておこうと思う。

すでに見てきたように、パブリック・スクールや大学は、その制度や組織編成において階層構造化され、支配階層が固有の文化を獲得・消費する場となっていた。逆説的だが、学校がこうして支配的な文化の獲得・消費のパターンのひとつとしてその重要性を増していけばいくほど、またその社会的排他性を強めていけばいくほど、学校は、未だ正統的な文化を保持していない人々にとっては、社会的な上昇を遂げていくための不可欠な手段として位置づいていくことになる。支配階層子弟の通う学校と同じか、あるいは類似した教育経験を所有することで、彼らの仲間入りの重要なパスポートが入手できるからである。

実際、18世紀後半には、中流階層の間にいわゆるコネを求めて息子を学校へ送る実践が流行する。もちろん、既存の学校教育の現状に対して、またパトロネジの獲得のために、あるいはただ単に一種の流行から息子を学校へ送るこうした実践に批判や反論がなかったわけではない⁴⁾。しかし現実には、学校は以後ますます社会の階層構造を反映して組織化され、支配的な文化獲得の競争の場として収斂されていく。前工業化時代の貴族・ジェントリの学校進出に始まる教育の学校化は、その後明確な形をとって進行していくこの過程の第一歩であった。

註

- 1) アリエスは「家族としての意識と青年たちの強度の学校化とは、同一現象の二つの側面であった」(4頁)と述べ、学校化の過程を、15世紀後半以降の貴族や上層ブルジョワジーの間に芽生えてきた子どもへの配慮を中核とする家族意識の発達の結果であると仮定した。P. アリエス『〈子供〉の誕生』(杉山光信・恵美子訳)みすず書房、1980年を参照。

- 2) P. ブルデュー『ディスタンクシオン』(石井洋二郎訳)新評論、1989年を参照。
- 3) N. エリアスの「文明化」の理論については、『文明化の過程』上下(赤井・中村・吉田訳)法政大学出版局、1978年。同『宮廷社会』(波田・中埜・吉田訳)法政大学出版局、1981年を参照せよ。
- 4) D. Wardle, *The Rise of the Schooled Society: The History of Formal Schooling in England*, 1974. pp. 2-3. より引用。
- 5) アリエス, 前掲書, 164頁, 238頁。
- 7) エリアス『文明化の過程』上, 189頁より引用。
- 8) 「ルネサンス国家」とは、「根本においては大きな膨張しつつある官僚制であり、行政上の中央集権の巨大な組織であって、たえず増加する「廷臣」や「官吏」を成員とする」国家である。トレヴァーニローパー他『17世紀危機論争』(今井宏編訳)創文社、1975年、90頁。
- 9) L. Stone, *The Crisis of the Aristocracy, 1558-1641*. Clarendon Press, Oxford. 1965. Reprinted with corrections 1979, p. 676.
- 10) エリオットは大学教育は受けなかったけれども、ギリシア・ラテンの古典に通じ、以後、1522年にオックスフォードシャーの治安判事、翌年から30年にかけて枢密院書記、そして30年にはナイトに叙せられた。そして更にヘンリー八世に献呈された本書の成功を買われてカール五世治政下帝国宮廷への大使を務め、42年にはウルジーやクロムウェルの知己を得てケンブリッジシャー選出の下院議員となった。エリオットの教育思想については、①松浦高嶺「イギリス・ルネサンスの歴史的背景」『英米文学史講座』2, 研究社、1960年。②越智武臣『近代英国の起源』ミネルヴァ書房、1966年。③岡田渥美「トーマス・エリオットの「為政者」教育論とヒューマニズム」京都大学教育学部紀要, XI, 1965年を参照。
- 11) Sir Thomas Elyot, *The Boke named the Governour*, 1531. Everyman's Library, 1962, p. 297.
- 12) L. Stone, *Crisis*, p. 687.
- 13) L. Stone, "The Size and Composition of the Oxford Student Body 1580-1910", L. Stone(ed.) *The University in Society*, Volume 1, 1974, Princeton U. P. pp. 3-10. p. 27.
- 14) M. H. Curtis, *Oxford and Cambridge in Transition 1558-1642*, Oxford Uni. Press, 1959, p. 59.
- 15) L. Stone, *Crisis*, p. 688.

- 16) Richard Mulcaster, *Positions*, 1581. ed. by Robert H. Quick, London, 1888. p. 189.
- 17) cf. Karl D. Bülbring, ed., *The Compleat English Gentleman by Daniel Defoe*. London, 1890. Forewords. pp. xxxv-xxxviii.
- 18) *ibid.*, p. XL. cf. M. H. Curtis, *op. cit.*, p. 270.
- 19) 越智武臣, 前掲書, 362頁, 365—66頁より引用。
- 20) エリザベス朝の政治上の活動分野について調査した大野によれば, この時代, 貴族に対するジェントリの著しい進出が見られた。例えば, ヘンリー七世の時代の大法官は全員が大司教や司教などの聖職貴族によって占められ, その下の国王秘書官も司祭であったのに, エリザベス朝期には彼ら全員が俗人のジェントリに取って代わられていた。大野真弓「エリザベス朝の貴族とジェントルマン」フェリス女学院大学紀要, 21, 1986年, 1—38頁参照。
- 21) Cf. L. Stone, 'The Educational Revolution in England, 1560-1640,' *Past & Present*, no. 28, 1964. p. 48, 63.
- 22) G. M. Trevelyan, *English Social History*, 1944. トレヴェリアン『イギリス社会史I』(藤原・松浦訳) みすず書房, 1971年, 156頁より引用。
- 23) George C. Brauer, *The Education of a Gentleman : Theories of Gentlemanly Education in England, 1660-1775*, 1959. p. 226.
- 24) cf. F. Musgrove, 'Two Educational Controversies in Eighteenth-Century England. Nature and Nurture; Private and Public Education', *Paedagogica Historica*, vol. 2, 1, 1962. pp. 81-94.
- 25) F. Musgrove, 'Middle-Class Families and Schools, 1780-1880 : Interaction and Exchange of Function between Institutions', P. W. Musgrave ed. *Sociology, History and Education*, London, 1970. pp. 117-125. p. 119.
- 26) N. Hans, *New Trends in Education in the Eighteenth Century*, 2nd ed. 1966(1951), p. 29.
- 27) グラマー・スクールの研究者ヴィンセントは, ハンスの結論を受けて, 伝統的な教育制度が18世紀に入っても引き続き衰退していたことを示そうと努力する。cf. W. A. L. Vincent, *The Grammar Schools. Their continuing tradition 1660-1714*. 1969.
- 28) ウォードルは, ハンスの数字は当時の家庭教育の重要性を過小評価していると主張する。D. Wardle, *The Rise of the Schooled Society : The History of Formal Schooling in England*, 1974. p. 11.
- 29) L. Stone (ed), *The University in Society*, p. 47.
- 30) *ibid.*, p. 37.
- 31) 以上の特待自費生の記述に当たっては, 主に L. Stone, *The Crisis of the Aristocracy, 1558-1641*, do., "The Size and Composition of the Oxford Student Body 1580-1910", を参照にした。
- 32) Henry Peacham, *The Complete Gentleman*, Virgil B. Helzel (ed.), Cornell U. P., 1962, p. 117.
- 33) L. Stone, *Crisis*, p. 702.
- 34) J. サイモンはハンスの「エリート」サンプルの抽出方法や統計的処理の仕方に疑問を提示し, ハンスにおいては経歴に学校(特に大学)の記載がなかったために除外された2000人—その多くは私営の古典学校に通っていた—を含めて集計し直した。彼女によれば, 「エリートの28.2パーセントはいかなる中等教育も受けていなかった」というハンスの結論は, 14パーセントに読み替えられなければならない。cf. J. Simon, 'Private Classical Schools in Eighteenth-century in England : a Critique of Hans', *History of Education*, 1979, vol. 8, no. 3, pp. 179-191.
- 35) M. V. Wallbank, 'Eighteenth Century Public Schools and the Education of the Governing Elite', *History of Education*, 1979, vol. 8, no.1, pp. 1-19.
- 36) J. Cannon, *Aristocratic Century : The peer of eighteenth-century England*, Cambridge Uni. Press, 1987(1984).
- 37) J. V. Beckett, *The Aristocracy in England 1660-1914*, Basil Blackwell, 1986.
- 38) J. Cannon, *op. cit.*, Ch. 2, Table 4, 5, 6.
- 39) M. V. Wallbank, *op. cit.*, p. 2.
- 40) J. Cannon, *op. cit.*, Ch. 2, Table 8, 9, 10.
- 41) N. Hans, *op. cit.*, pp. 44-46.
- 42) J. V. Beckett, *op. cit.*, p. 101.
- 43) 水谷三公『英国貴族と近代』東京大学出版会, 1987年, 47頁。
- 44) J. Cannon, *op. cit.*, p. 43.
- 45) この点については, S. Rothblatt, *Tradition and Change in English Liberal Education : An Essay in History and Culture*, Faber & Faber, 1976. を参照せよ。

- 46) R. K. Root ed., *Lord Chesterfield : Letters to His Son and Others*. Everyman's Library. p. 152.
- 47) 拙稿「18世紀ジェントルマン教育の変容—家庭教育から学校教育へ—」『教育学研究』第53巻1号, 1986年, 103—112頁を参照。

[付記] 本研究は, 昭和62・63年度〈科研費〉総合研究(A)「西洋近代の家族・学校・社会における大人と子どもの関係と大人の権威の社会史的研究」(代表者 宮澤康人) の研究成果の一部である。